

知覚と表現

—メルロ＝ポンティの身体図式と コミュニケーション

柿沼美穂（東京工芸大学）

本発表では、舞踊をはじめ、絵画、音楽といった人間の表現が、見る人あるいは聞く人、いわゆる「鑑賞者」である私たちになぜ知覚され、鑑賞されうるかということ、つまり、表現者と鑑賞者の間に生じるコミュニケーションの可能性について、メルロ＝ポンティの身体図式を手がかりとして再考する。

近代以降の芸術においては、表現者と鑑賞者の乖離が大きくなる。特に 20 世紀後半からは受容美学と生産美学という分類も行われている。では、表現者と鑑賞者は何が違うのだろうか。そして、もし違いがあるとしたら、両者の間にある関係はどのように成立するのだろうか。

認知科学や心理学などにおいて、こうした表現と知覚の違いは、対自的（客観的）な身体イメージの有無が原因だといわれている。これは、（メルロ＝ポンティも取り上げている）シュナイダー症例などから導き出された考え方である。

シュナイダーは、目を閉じているときに身体の部位を触られても、それがどこかを言うことができず、手足を動かすように言われてもすぐには動かさない。また、自分の鼻の位置を指さすように言われてもできない。ところが、鼻をかむといった、生活に必要でその状況に即した具体的かつ習慣的な movement は行うことができる。

こうしたことは、しばしば、彼には即自的（無意識的、前人称的）な身体意識しかなく、対自的な身体イメージをもっていないためだと説明される。たしかに抽象的で周囲の状況に必要とされていない movement を遂行したり、新しい movement を自ら作り出したりするには、対自的な身体イメージが必要というのは納得しやすいストーリーである。それは、舞踊家がリハーサルに鏡を用いて movement の形を「外から」確認するようなことだからだ。

しかしながら、対自的な身体イメージの有無によって表現者と鑑賞者を分けてしまうのは、少々粗っぽいのではないかと発表者には思われる。

理由の一つは、もし身体イメージの有無によって表現者と鑑賞者が分けられるとしたら、多くの人が舞踊をはじめとする芸術を受容し鑑賞している現実を説明できなくなるからである。この両者の間には、ある種のコミュニケーションが成立しているように思われる。

もし鑑賞者が身体イメージをもたないとしたら、表現者とのコミュニケーションは不可能、少

なくとも限定的になると考えられる。実際、受容美学においては、鑑賞者も解釈という一種の創造あるいは表現行為を行うとされており、このことから身体イメージの有無が、表現者と鑑賞者を分けるという考え方は適切でないとわかる。

以上のことから、表現者と鑑賞者はおそらく同様の身体図式をもち、その発露あるいは使い方の違いで立場を異にすると考えるほうがよいと推測される。

発表者はここで、メルロ＝ポンティの身体図式をもう一度見直したいと考える。彼の身体図式は、自覚を必要とせずに機能する、身体における感覚-運動のシステムであり、私たちはこのシステムを起点として世界とかかわっている。この身体図式に対自的な身体イメージは組み込まれていない。しかし、そのかわりに、その場における状況としての世界を見るだけではなく、可能的世界、すなわち、「あり得る」世界を思い浮かべる能力が備わっていると考えている。

この能力は「投射機能（fonction de projection）」と呼ばれている。メルロ＝ポンティの身体図式は、身体と世界を分けて考えるのではなく、身体と世界を含めて考えられている。メルロ＝ポンティによれば、身体にとっての世界は、すでにそこにある所与としての世界だけでなく、これから生じうる世界でもあるのである。

こうした可能的な世界は、想像によって生み出されるファンタジーのようなものだけでなく、自分が歩いていて階段を降りようとするときの身体の使い方、あるいは、実際にはないけれども熱い砂の上を歩くことを思い浮かべるときに生じる身振りといったことにも関係する。さらに、自分の外側に「出て」、自分の姿を「見る」といった視点の変化、つまり対自的な身体イメージをも生み出すと考えられるのである。

メルロ＝ポンティは自らの絵画論において、鑑賞者は、画家が見る世界と同様の世界を見る力（少なくとも可能性）を有しているとならに考えているが、それは両者が、同じような身体図式を有するという前提に立っているからである。

表現者と鑑賞者が、上記のような共通する身体図式をもつのであれば、両者の間のコミュニケーションの可能性は非常に理解しやすくなる。表現者は所与の世界とともに可能的な世界を鑑賞者に示し、鑑賞者はそれをヒントに新たな可能的世界を見出していくという関係性を考えることができるからである。

そして、このような身体図式を踏まえると、表現者どうしがパフォーマンスのようなコラボレーションにおいて自らの表現をオンタイムで変化させ、新たなスタイルを見出すという事象についても理解を進めることが可能となるのである。